

茨城大学 iOP ガイドブック

茨城大学



はじめに

「自分探しの旅に出る」という気持ちになったことがあるかと思います。英語で言えば、“Finding Oneself”でしょうか。大学で学修することもそれに似ているかもしれません。でも、大学では、「自分を知ること（“Knowing yourself”）」から始まります。その次のステップは、「自分のブランドを築くこと（“Building Your Brand”）」です。さらに学修を深めて、「自分の生き方を語ること（“Telling Your Story”）」のステップに進みます。最後は、社会に出て職場で活躍できる力を身に付けるステップです。その力を英語で格好良く言えば、“Navigating the Workplace”でしょうか。このように大学の学修を捉えて、生き生きした自分を作ってみませんか？

もう一度、黄色のコミットメントブックを開いてみて下さい。上記の4つのステップが大学での4年間の各学年での学修にほぼ相当することがわかると思います。3年次・第3クォーターのiOP (internship Off-campus Program) は、あなたのストーリーを学外で実際に展開してもらうプログラムです。皆さんのiOP体験が次のステップの糧になることを期待しています。



副学長（教育統括） 太田 寛行

注：上述のステップ（英語のフレーズ）は大学でのキャリア教育の基本です。それらの英語フレーズは米
国大学のキャリアセンター等での案内にしばしば出てくる表現です。

目 次

はじめに

1. iOP とは	1
2. なぜ iOP なのか	1
3. iOP の要件	7
4. iOP の流れ	8
5. iOP 活動の種類	11
・ 海外研修	12
・ インターンシップ	15
・ サービス・ラーニング	18
・ 発展学修	20
6. iOP 活動に当たっての留意事項	23
7. iOP の修了・活動の認定	23
8. iOP に関する相談等窓口	23

1 iOP とは

iOP とは「Internship Off-campus Program」の略で、3年次の第3クォーター（9月下旬～11月）に原則として必修科目を開講せず、大学全体で特に学外における学びを促進する制度です。この期間は夏休みともつながっているため、学生によっては4か月近くの間、授業を履修しなくても4年で卒業できるように科目が配置されています。

皆さんにとって、授業を履修して単位を積み重ね、無事に卒業することは最優先だと思います。しかし、「授業のないこの期間に何をするか」も、とても重要です。

校内での学びだけでなく、学外での社会体験活動などが重要とされています。しかし、以前には学生の皆さんがこれらの活動を行える環境は整っていませんでした。そのため、茨城大学では2学期クォーター制の導入とともに、3年次第3クォーターに必修科目を開講しないiOPクォーターを設け、学生の皆さんが学外をキャンパスとして学び、たくましく成長してもらえるようにしました。

2 なぜ iOP なのか

大学の養成する人材への期待

グローバル化、情報化の進展、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、将来の予測が困難な時代になっています。このような中、大学に対しては、一人一人の能力を向上させて、グローバルな視点をもって、未来を切り拓くことができるたくましい人材を育て、社会に送り出す機能を強化していくことが求められていますが、その一方で、社会からは以下のことが指摘されています。

豊かで安定した日本社会で育った今の学生たちは、

- ・「何のために学ぶのか」という動機づけが不足し、学習態度が受け身
 - ・主体的に考えて表現していく力
 - ・グローバルな視点や国際的なコミュニケーション力
 - ・自立心や競争意欲
- } 不十分で弱い

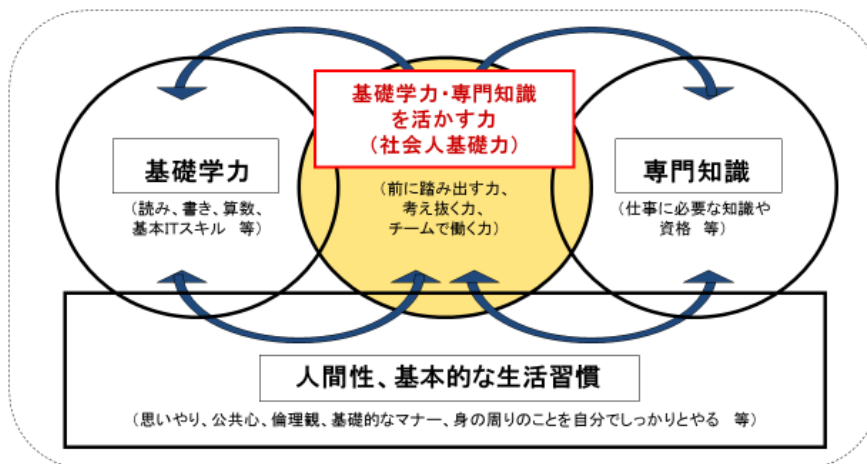
「学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議 意見のまとめ」（平成26年5月）より

これらの意欲・能力を身につけるためには、世界や現実の中に飛び込んで価値観の異なる社会体験を通して広い視野と高い志を養い、主体的な学びの動機づけが重要とされています。

下の図を見てください。やや古いですが、これは平成18年に経済産業省が「社会人基礎力」として定義づけた「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」で、3つの能力（12の能力要素）で構成されています。

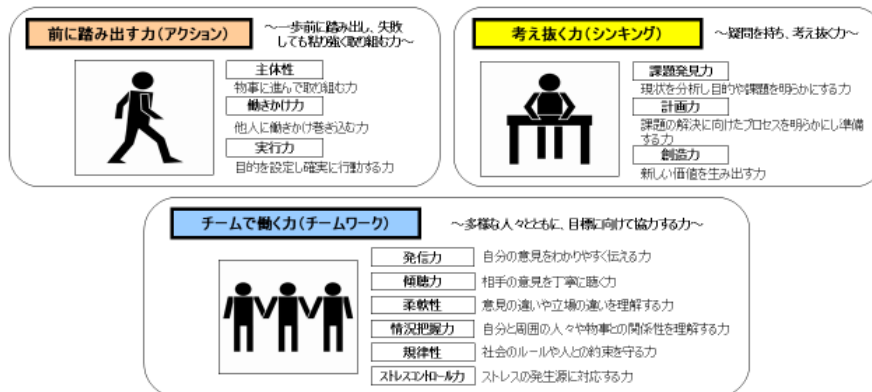
今、社会(企業)で求められている力

➤「基礎学力」「専門知識」に加え、今、それらをうまく活用し、「多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力＝社会人基礎力」が求められている。



社会人基礎力とは

(3つの能力/12の要素)



経済産業省 HP 社会人基礎力説明資料 より

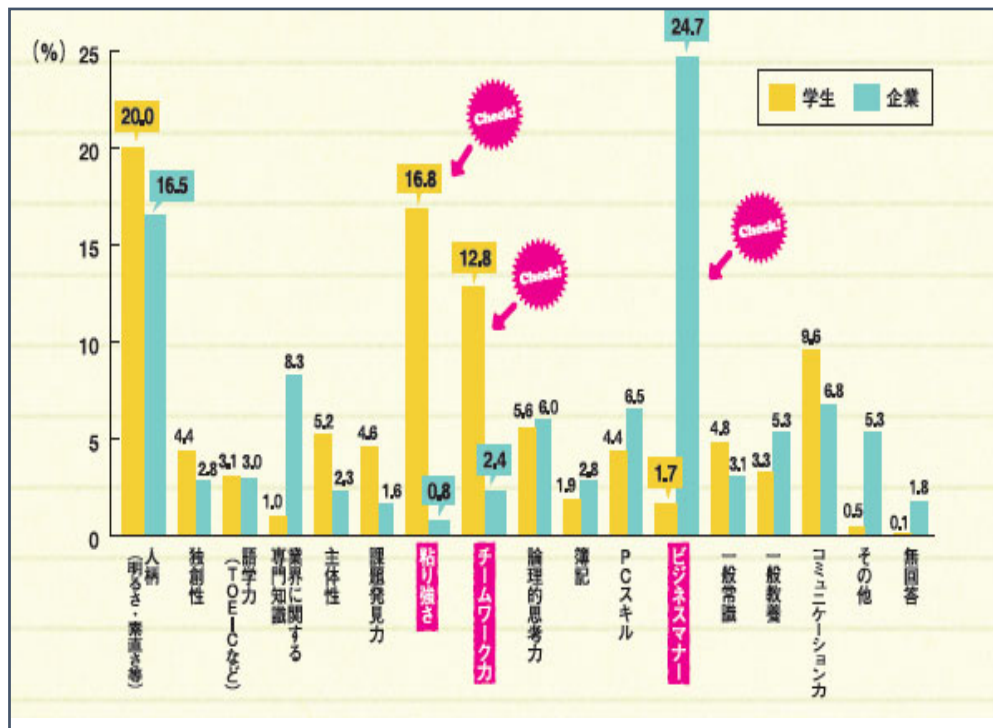
また、下の図は平成 21 年に経済産業省が行った調査で、「身につけている能力・不足している能力」について、企業と学生の認識のギャップを表したものです。

これを見ると、「社会人基礎力」の中で社会の求める力として挙げられた能力・要素にも関わる「粘り強さ」「チームワーク力」「主体性」「コミュニケーション力」について、学生は「十分に身につけている」と考えていますが、企業側は「まだまだ足りない」と認識していることがよくわかります。

このような調査は最近でも様々なところで実施していますが、概ね同様の結果が出ています。

企業と学生の意識のギャップ

(自分が既に身につけていると思う能力は？ (対学生)、学生が既に身につけていると思う能力は？ (対企業))



(経済産業省「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査」平成 21 年)

また、一般社団法人日本経済団体連合会（経団連）が 2017 年 11 月に公表した「2017 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」において、企業が学生

を採用する「選考にあたって特に重視した点」（5 つまで選択）の上位は

- 1 位：コミュニケーション能力（82.0%）
- 2 位：主体性（60.7%）
- 3 位：チャレンジ精神（51.7%）
- 4 位：協調性（47.0%）
- 5 位：誠実性（44.2%）

「2017 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」（2017 年 11 月 27 日 一般社団法人 日本経済団体連合会）

となっています。

ディプロマ・ポリシーと iOP

みなさんは、入学時にもコミットメントセレモニーなどで、茨城大学のディプロマ・ポリシー（DP）の説明を受けたと思います。

ディプロマ・ポリシーとは茨城大学を卒業するために身につけることが必要な能力で、卒業基準・学位授与の方針とも言います。

これらは各学部や学科等の単位でも定められていますが、全学のディプロマ・ポリシーは下記のとおりとなっています。

【茨城大学ディプロマ・ポリシー】

茨城大学の教育目標は、変化の激しい 21 世紀において社会の変化に主体的に対応し、自らの将来を切り拓くことができる総合的人間力を育成することである。そのために茨城大学の学生が卒業する時に身に付けているべき能力を、以下に示す 5 つの知識及び能力で構成されるディプロマ・ポリシー（卒業基準）として定める。これら 5 要素の比重は分野毎に異なるが、茨城大学を卒業する学生は、どの分野で学んだとしてもこれらの知識・能力を備えていることが必要である。

- ①（世界の俯瞰的理解）自然環境，国際社会，人間と多様な文化に対する幅広い知識と俯瞰的な理解
- ②（専門分野の学力）専門職業人としての知識・技能及び専門分野における十分な見識
- ③（課題解決能力・コミュニケーション力）グローバル化が進む地域や職域において，多様な人々と協働して課題解決していくための思考力・判断力・表現力，及び実践的英語能力を含むコミュニケーション力
- ④（社会人としての姿勢）社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての意欲と倫理観，主体性
- ⑤（地域活性化志向）茨城をはじめとする地域の活性化に自ら進んで取り組み，貢献する積極性

前に述べた企業と学生のギャップや企業が選考にあたって重視した点を思い出してください。そしてディプロマ・ポリシーに掲げた各項目と比較してみてください。

ギャップの大きかった「粘り強さ」「チームワーク力」「主体性」「コミュニケーション力」は、ディプロマ・ポリシーの

③課題解決能力・コミュニケーション力

④社会人としての姿勢

⑤地域活性化志向

に書かれた内容を見れば、これらを身につけることで網羅していると言えます。つまり、茨城大学を卒業するために必要な能力は、社会が求める能力ということもできます。

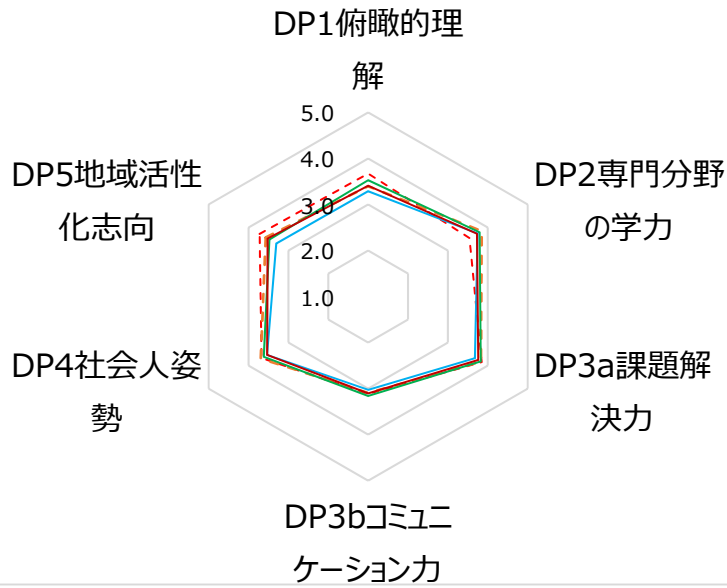
茨城大学の教育課程（カリキュラム）は、これらの能力を身につけることができるように編成されています。しかし、キャンパス内における学びだけで、これらの能力が「十分に」備わったと自信を持って言えるでしょうか。特に上記の③④⑤に掲げる能力について深く学ぶ、あるいは実践するような授業科目は、それほど多く開設されているとは言えませんし、これらの能力は、学外での学び・経験を通じて身につけることが最も効果的です。その活動を促進するための制度がiOPなのです。

次ページのグラフは、平成29年3月に卒業した先輩たちが、卒業時にどのような力が身についたかを自己評価したアンケート結果です。コミュニケーション能力に課題を感じているのが分かります。

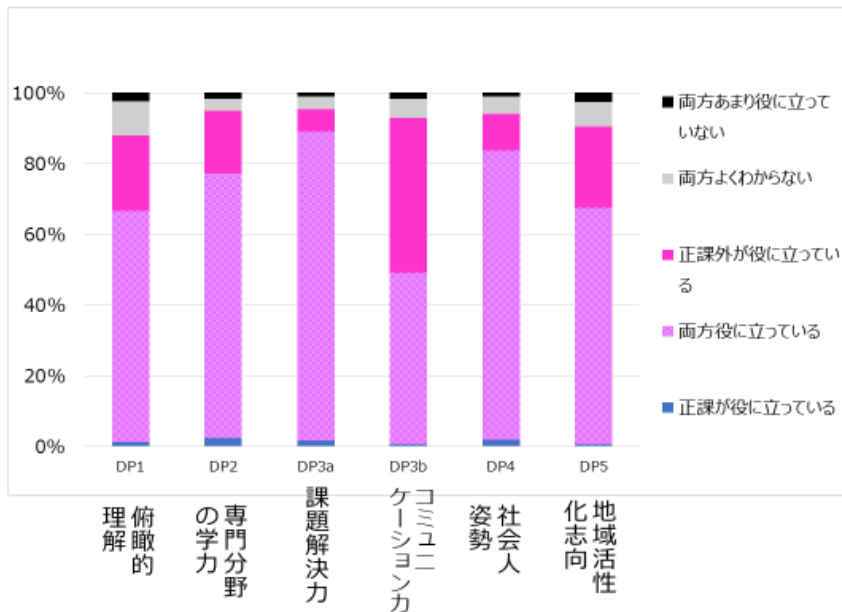
さらに下の段のグラフは、茨城大学を卒業して3年程度経過し、すでに社会で活躍されている先輩たちに協力いただいたアンケート結果です。在学中の正課（授業）、正課外の活動が、社会人となってどの程度役立ったかを聞いていますが、コミュニケーション能力をはじめとして、正課外の活動も重要であったと感じているようです。

H28 年度卒業生DP修得の自己評価（学部別）

--- 人文社会科学部 --- 教育学部 --- 理学部 --- 工学部 --- 農学部



正課／正課外 実社会での有効性



茨城大学の授業科目は、すべてがディプロマ・ポリシーに掲げた力を身につけることを目的に開講されています。コミュニケーション能力についても、ディスカッションやグループワークなど対話的な学びを取り入れた授業を多く開講し、みなさんがその能力を身につけられるようにしています。しかし、卒

業するために授業を履修することで、これらの能力は身についても、社会の求めに対して「十分に備わったか」となると、授業以外の活動も非常に役立っているといえます。

iOP の目的

iOP は、学生のみなさんが学外等を学びの場として、主体的に計画し、活動することができる機会を提供することにより、ディプロマ・ポリシー要素の内、特に



課題解決能力・コミュニケーション力



社会人としての姿勢



地域活性化志向

を身につけ、それらの学びを通じて



世界の俯瞰的理解



専門分野の学力

を深めることを目的としています。

3 iOP の要件

iOP の活動は、一定の要件をクリアした場合、大学がその活動を認定します。認定された場合、「認定証」を交付するとともに「学業成績証明書」に活動内容が記載されます。

認定を受けるためには、以下の要件を満たす必要があります。

- ①茨城大学が iOP として用意した、または認めた活動であること
- ②事前指導を受けること、または主体的な事前学修が行われること
- ③活動は、終日の活動で原則 5 日以上又はこれに相当する時間(30 時間)行われること
- ④事後指導を受けること(成果報告)

上記③の活動日数・時間については、その活動が③の要件を満たさない場合

であっても、複数の活動を組み合わせて要件を満たすことも可能です。ただし、その場合は iOP の趣旨に沿った、一貫した活動でなければ認められません。趣旨に沿った活動であるかの判断については、23 ページの相談窓口を確認してください。

4 iOP の流れ

iOP は、原則として3年次の第3クォーター（夏季休業を含む）に学外等において活動を行うものです。

3年次の年間スケジュール

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
前学期						後学期					
前学期 授業期間				学外等における 学修期間 (夏季休業)	後学期 授業期間				学外等における 学修期間 (春季休業)		
第1クォーター 授業期間		第2クォーター 授業期間			第3クォーター 授業期間		第4クォーター 授業期間				
						i O P					

しかし、単にその活動に参加しただけでは iOP の目的を達成したとは言えません。

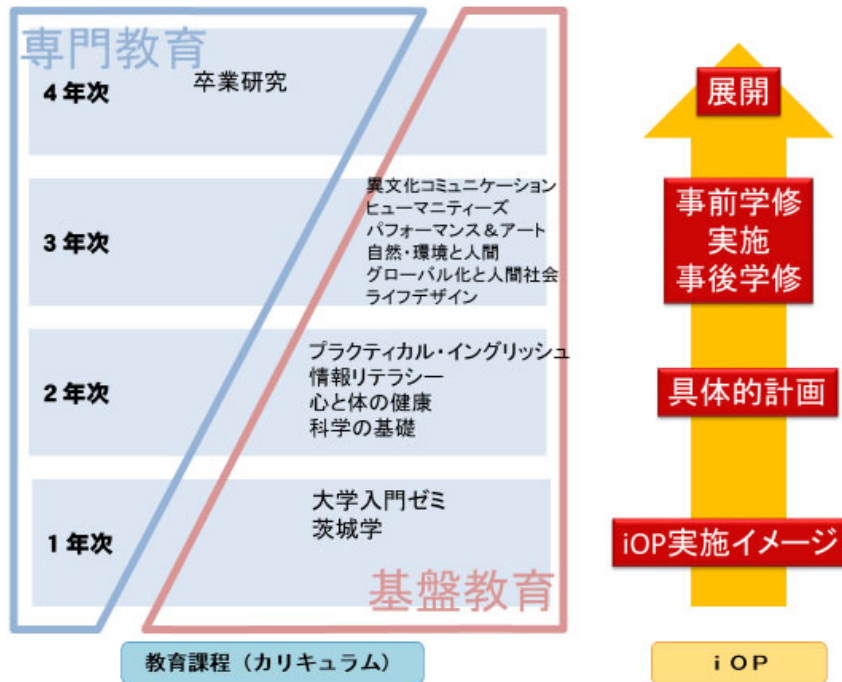
iOP は

- ①主体的に身につけたい能力を意識し【目的】
- ②そのための計画や事前学修を行い【準備】
- ③実際の活動を行い【実施】
- ④事後学修を行う【振り返り・展開】

といった一連の活動を行うことで完結します。

つまり、次ページのように、4年間の教育課程（カリキュラム）とも関連した学びであると言えます。

4年間の教育課程とiOP



〔各段階での取組〕

iOP 活動に向けて、1年次からの各段階における取組内容は以下のようになります。

ただし、これはモデル的な取組であり、iOPの目的・活動内容はさまざまですので、担任に相談したり、各活動の説明会や成果報告会などに積極的に参加して、いろいろな可能性を模索してください。

○1年次

自身が身につけたい力や将来（キャリア）を考えながら、基盤教育科目・専門科目等を履修し、3年次のiOP活動をイメージしてください。例えば、先に述べた「社会人基礎力」に挙げられている要素をみて、強みを伸ばす、弱みを補うなど、さまざまな考え方があると思います。もちろん、授業以外の活動において考えるきっかけをつかむ場合もありますので、大学の内外において積極的に情報の収集をしてください。

これらの身につけたい力、3年次の活動イメージなどは、各学部所定のポートフォリオに記録するようにしてください。

○2 年次

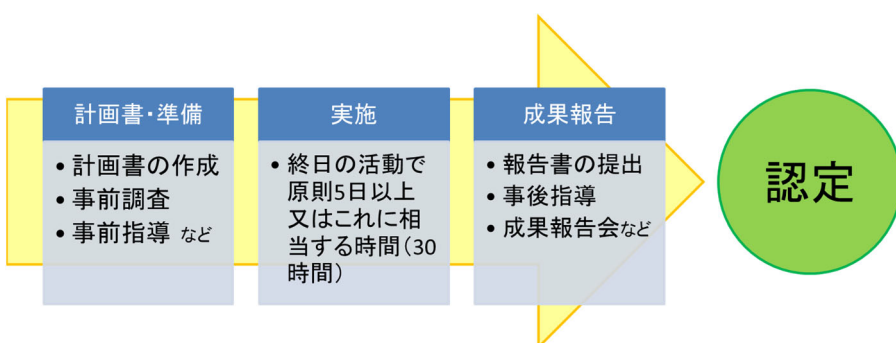
1 年次にイメージした活動内容について、その目的をより具体的にし、目的達成の計画を立てます（例えば語学力の向上・活動資金の工面・活動するフィールドの実地視察など）。

計画に課題があると感じたら、積極的に担任等に相談してください。大学でも助言や支援ができることがたくさんあります。

もちろん、1 年次段階のイメージや 2 年次に計画した内容が、その後の学びや経験によって変わることもあるでしょう。それはむしろ当然のことなので 3 年次の計画書提出の時点までに計画を固めれば問題ありません。

○3 年次

いよいよ実際の活動をする 3 年次です。年間の流れは以下のとおりです。



活動に向けての具体的な計画書を作成します。実際に活動する中で計画した内容と変わることがあるかもしれませんが、しかし、計画の目的・趣旨を大幅に変えてしまうものでない限り、支障はありません。実施していく中で、当初の目的より発展した活動などができるようになれば、むしろ望ましいと言えます。

○4 年次

iOP としての活動は原則として 3 年次で終了しますので、4 年次の始めには認定証を受けることができます。また学業成績証明書に活動内容が記載されます。

しかし、前に述べたように、iOP はディプロマ・ポリシーに掲げる能力・社会が求める能力を身につけるための一連の活動ですので、認定で完結することなく、主体的に、卒業研究や卒業後のキャリアに iOP の経験を活かすなど、発展・展開させてください。

5 iOP 活動の種類

iOP には、主な学外学修として次の表に示すような活動があります。

分類	名称	備考
海外研修	留学	数か月の期間で、主に交流協定を締結している大学への留学。その他、個人で探した留学先や休学と合わせての留学なども含まれる場合があります。
	短期海外研修	2～4 週間程度の期間、協定締結大学または協定外の各大学が行う語学研修や現地の異文化理解活動を行うもの。本学授業活動の一環として行うプログラムもあります。
インターンシップ	各学部・全学教育機構 インターンシップ (企業・官公庁等) 教育インターンシップ (学校等) 国際インターンシップ	本学授業活動の一環として行うもの、授業外の活動として行うものなどがあります。 期間・活動内容も受入先によって多様な形態をとっています。
サービス・ラーニング	ボランティア活動	大学内での学びを活かし、ボランティア活動等を通じて実践的能力への展開が期待される学びの形態です。 教育やスポーツ活動のボランティア、福祉関係ボランティア、地域活動ボランティアなど多様な活動があります。
発展学修	課題解決ゼミなど	学部の学外学修、社会連携センターや本学教員が企画・支援した授業やプログラムの学外学修があります。
	自主研究など	自主研究や学会や自治体、各種団体等で実施しているコンテストやサイエンスインカレ(主催:文部科学省)等への応募があります。

上記の活動の他、複合した取り組み(海外インターンシップ、海外ボランティア)などもあります。

iOP は教育学部を除き、平成 29 年以降の入学者が 3 年次になったときに実際の活動が行われます。しかし、iOP ではなくとも、実際に学外における学びを経験している先輩学生もたくさんいますので、次ページ以降に活動のねらいや事例を紹介します。

また、茨城大学が提供する iOP 活動以外に、学生のみなさんが主体的に企画し取り組んだ活動も iOP として認められる場合があります。チャレンジしたい取組がある、という場合には、23 ページの相談窓口に相談してください。



海外研修

海外研修のねらい

海外研修には受け入れ先大学等で専門的な学習をする留学だけではなく、語学研修、文化交流、地域支援ボランティアなどさまざまなものがあり、その目的や趣旨もさまざまです。それでは同じ内容のプロジェクトを国内で行うのと何が違うのかと問われれば、それは完全にアウエーの中で実施するということになります。私達とは違う文化、言語、考え方、生活様式の中でいかにして自力で生きていくか、自分の考えを伝え、相手を理解し、与えられたプロジェクトを成功させるかといった課題への挑戦です。それを通して得られるものは単なる知識や語学力ではありません。グローバルな思考や行動力、課題の発見と挑戦、相互理解、公共的な責任感、大局的な判断力といった能力を涵養することが期待されます。

チャレンジする学生へのメッセージ

(グローバル教育センター長：佐藤 達雄)

皆さん、「旅は人を育てる」と言います。学生時代にぜひ一度は海外に出てください。初めての海外生活は、いわばサバイバル体験の連続になると思います。見知らぬ土地で生き残るために四苦八苦したこと、そして人から親切にしてもらったこと、達成感は一生涯忘れないでしょう。そして世界のどこに行っても、どんな人たちでも、どんな文化でも、人の心って案外変わらないなあ、と思った瞬間、あなたはどこでも生きていけるはずです。



主なプログラム

留学：数か月間にわたって茨城大学と交流協定を締結している大学で学びます。協定を締結しているため、その修得単位は本学で修得したものとみなされ、卒業要件に算入することができます。

短期海外研修：海外の大学又は語学施設等で2～4週間程度の学修や、現地において文化交流等を行います。本学授業の一環として実施されるものと、海外の大学等で実施される語学の授業を履修して与えられた単位を本学で修得した単位としてみなすものがあります。

これら「留学」と「短期海外研修」について、どのようなプログラムがあるかは、グローバル教育センターに相談してください。

また、上記プログラムの他、学生が個人で留学・研修先を探して活動した場合であっても、iOPの基準を満たせば活動が認定され、さらに修得した単位についても本学で履修したものとみなされる場合があります。

海外研修体験談

細川 凌一さん（教育学部 情報文化課程 4年次）
アメリカ・ペンシルバニア州立大学に1年間留学



幼い頃から洋画等の影響でアメリカに興味があり、アメリカの人や文化に直に触れたいという思いからペンシルバニア州立大学の学内選考に申し込みました。それに通り、晴れて渡米が決定しました。しかしリスニングに自信がなかった私は、初め現地の人たちの会話が聞き取れず苦労しました。

そこで毎日2時間以上TEDtalks等を聞き、リスニング力の向上を図ると徐々に耳は慣れ、後期の正規の授業内では現地の学生と議論できる程に成長し、多国籍なサークル内では一生の友達もできました。非常に有意義な1年弱でしたが、事前にもっと勉強していれば、より充実した1年だったと思うので日本でできることは着実にこなしておくのが賢明かと思います。



岸本 和樹さん（工学部 都市システム工学科 4 年次 ）

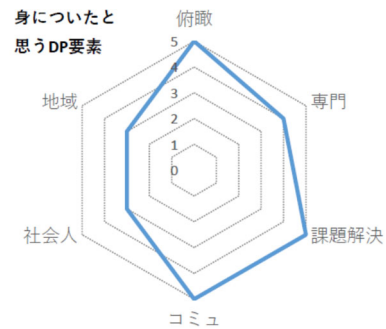
ブルネイ・ダルサラーム大学短期英語語学研修に参加



このプログラムには、英語力の向上を目的に参加しました。
スケジュールとしては、授業が午前に1コマ、午後に1コマ
で、授業の後は各々自由な時間を過ごしました。
ブルネイの文化に触れたり観光したりするなど、日本ではでき
ない体験ができたのでプログ

ラムに参加して本当に良かったし、様々な考えを持った
メンバーと参加したため、とても刺激的でした。フ
リータイムも多いため、是非自分自身を見つめなおし
たいという学生さんにはお勧めです。

今回短期留学に参加して、様々な視線から物事を考
える力と、頑張っって英語を聞こうと努めることで傾聴
力がついたのではないかと思います。



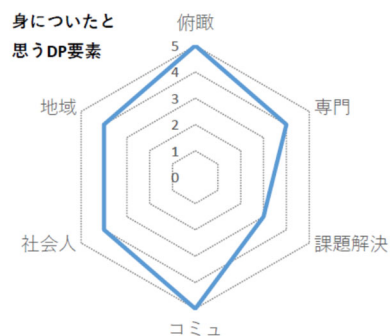
丸山 裕香さん（人文学部 人文コミュニケーション学科 4 年次）

イギリス・グロスターシャー・コレッジ短期語学留学プログラムに参加



英語圏で異文化体験をしたいと思い、このプログラム
に参加しました。渡航するにあたり、学内の事前授業で
英国の歴史や生活文化、危機管理について学びました。
研修は17日間で、最初の約2週間はチェルトナムとい
う町にある学校で語学研修、残りの約2日間はロンドン
で文化研修をしました。チェルトナム滞在中はホームス

テイをさせていただき、個人で行く観光旅行では味
わうことのできない、英国の生活スタイルを体験す
ることができました。初めての海外で不安だったの
ですが、大学の先生が引率してくださったので安心
して研修に参加することができました。今回の研修
は、異文化理解を深めることはもちろんですが、日本
を世界の視点から見つめ直す良い機会となりました。





インターンシップ

インターンシップのねらい

インターンシップとは、企業等での就業体験のことです。短期的なものや長期的なものなどさまざまな形があります。実際の仕事の体験を通して社会人とコミュニケーションをし、社会に出るための準備ができる貴重な機会です。

「自分は何がやりたいのか」考えてみてください。企業リサーチを（今！）行うことで職業観を培ってください。業界研究をしたり、直接企業に電話を試してみたり、先輩の話を聞いてみたり、事前・事後学習や振り返りも含めてきつと多くの楽しい体験が待っています。

チャレンジする学生へのメッセージ（キャリアセンター：小磯 重隆）

学生の皆さんが在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した「就業体験」をすることをお勧めします。インターンシップを利用して、企業の業務に直接触れてみてください。次のようなメリットがあります。

- ・ 就職活動本番の流れを先に体験できる
- ・ 参加した企業や業界について深く理解できる
- ・ 社会人として必要な基礎がわかる
- ・ 自己理解ができ、自分自身を成長させられる
- ・ 参加企業に就職希望であれば有利になる可能性が高い

また他にも、

- ・ 大学で学ぶべきことが見えてくる
- ・ 自分の適性やキャリアビジョンを考える参考になる
- ・ 参加学生との人脈（人のつながり）ができる
- ・ 実際にキャリアやスキルが身に付けられる など等

しっかりと「目的意識」を持つことが大切です。任された仕事ではなく、この体験から「必ず何かを得るんだ！」という強い意識が重要です。



主なプログラム

就業体験ができる色々なタイプのインターンシップがあります。

- ・ 実際に業務に従事するもの
- ・ 課題の解決等を体験するもの
- ・ 補助的な業務の一部を経験するもの
- ・ その企業の課題解決に取り組むワークショップやプロジェクトの体験

一般企業のほか、公務系の自治体や省庁、学校、NPO等で実施します。

教育課程として単位認定を行うものと、単位のない自由参加があります。

有償のインターンシップもあります。いずれの場合も要件を満たせば、iOPとして認定されます。

インターンシップ体験談

紺野 実来さん（教育学部国語選修 4 年次）

教育学部 iOP「教育インターンシップ（水戸市立常磐小学校）」

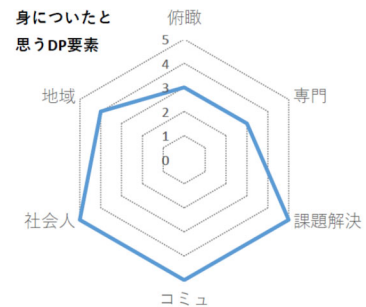
注）教育学部は平成 29 年度から iOP を先行実施しています。



活動の動機は、教育学部生としてできる限りの経験をしたいという思いからです。学生に寄り添い、日程調整を行ってくださるので、準備・活動共に無理なくできました。教育実習で学んだことを踏まえて、子どもとのコミュニケーションや授業中の支援ができ、教育実習での学びをより自分の中に落とし込むことができます。この活動ならではの良さは、教育実習よりも主体的判断力が大いに試されることです。

それが困難でもありますが、実践的な学びに繋がっており、教育実習と合わせて経験しておくべきです。

人として大切な気配りが学べ、多くの気づきがあり、教職を目指す人はもちろん、そうでない人にもぜひ経験して頂けたらと思います。



中島 まどか さん（人文学部 人文コミュニケーション学科 4 年次）

インターンシップ先：「株式会社ジェイ・スポーツ」



私は JSPORTS で一週間インターンシップに参加しました。JSPORTS は国内最大 4 チャンネルを持つスポーツ専門チャンネルです。将来、スポーツとメディアが関わる現場で働きたいと考えているため、このインターンシップに参加しました。このインターンシップでは、様々な部署の話聞くだけでなく、実践的に CM を作りナレーションを撮ったり、プレ

ゼンテーションを行ったりと活動できました。また、同じ業界を目指す他大学の同級生と交流ができたのもとても良い経験でした。ぜひ、インターンシップを通して自分のやりたいことや足りないことをはっきりとしてもらえたらと思います。



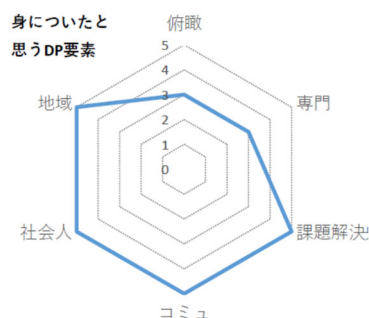
青柳 利久未さん（理学部 理学科学際理学コース 4年次）

インターンシップ先：「(野外活動革新事業)ストームフィールドガイド」



私は2017年8月中旬～9月末までストームフィールドガイドのインターンシップに参加させていただきました。そこでは、那珂川を拠点に、カヌーなどを用いた川下りのレジャーなどをやっています。私はそこで、実際にインストラクターの補佐として働かせていただきました。カヌーはやったことがな

く、普段からもアウトドアに行くようなこともありませんでした。しかし、普段関わりのないところに身を投じることで、自分の成長につながるのではないかと思います。実際に働いてみて、お客さんにどうしたら話を聞いてもらえるのか、どのように言えば楽しんでもらえるのか、また、命を預かる職でもあるので、責任の重さなども考えさせられるものとなりました。ここでの経験は他ではなかなか味わえないものだと思うので思いきって参加してみて本当によかったと思っています。



大村 みるほさん（教育学部 情報文化課程 3年次）

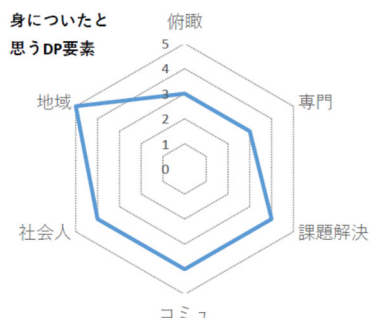
インターンシップ先：「ひたちなか市役所観光振興課」



私は2年生の夏休みに地元であるひたちなか市の市役所観光振興課で、10日間のインターンシップを行いました。観光や広報に関する仕事に興味があったことと、市役所での仕事を実際に体験したいと思ったことがきっかけです。インターン期間中、観光振興の基本である情報発信や、企画立案、イベントの運営補助を行わせていただきました。活動を通し

て、どうしたら市の観光資源を多くの人に知ってもらえるか、興味を持ってもらえるか、ということを考えることができました。実際に情報発信のための記事を作成したり、企画立案をすることは、とてもやりがいがあったし「人に思いを伝える」という点でも勉強になりました。

インターンシップは就職を考えるにあたって良い経験にもなるし、人としても成長できる場だと思うので、今後も機会を生かしていきたいと思いました。





サービス・ラーニング

サービス・ラーニングのねらい

サービス・ラーニングは「教室でのアカデミックな学習と地域社会での実践的課題への貢献を結びつけた経験学習の一形態である教授・学習法」と定義されています。

教室で学んだことを活かして、地域社会が抱えるさまざまな課題に向き合い、ボランティア活動などを通じて解決に取り組むのが主なプログラムです。活動内容は専門分野の知識・技能を活用するものだけでなく、基盤教育やプログラム科目、資格取得のための学びなどを活かせるものもあります。

活動を通じて、大学での学修内容の理解を深めるとともに、市民的責任が育まれ、社会参加の促進につながることを期待されます。

チャレンジする学生へのメッセージ(学生支援センター長:西川 陽子)

日本は非常に便利で社会制度も充実しているほうではありますが、万人にとって十分とは未だ言えず、それらの不足の一部はボランティアにより支えられています。東日本大震災では多くの人々が見返りなくボランティアとして活動し、復興の大きな力となりました。ボランティアをされた方々は、単に自分が人の助けになればとの一心で活動されましたが、終わられると皆さん多くの得るものがあったと言われます。自分が生きていることの意義、一生を安心して心豊かに生き抜くために互いに手を差し伸べることの重要性、それらは人との直接のやり取りからしか学ぶことはできず、それらに気づくことができた貴重さから出る言葉です。ボランティアを通じて、普段の自身の生活では出会うことのあまりない人や環境に身を置き、自らの視点を変える体験を是非して欲しいと思います。



主なプログラム

ボランティア活動は、継続的に行われるもの、一定期間で完結するものなど多様な活動があります。どのようなプログラムが用意されるかについては、23ページの相談窓口や、掲示及び各種ガイダンスで情報提供します。

サービス・ラーニング体験談

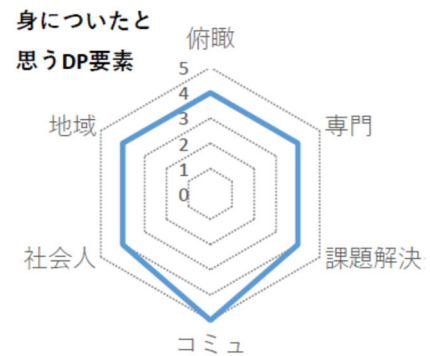
木下 絵美梨さん(人文学部人文コミュニケーション学科 平成30年3月卒)

学生地域参画プロジェクト「まなびの輪」による大洗町での活動



大学2年生から3年生まで、大洗町において多文化共生のまちづくり推進を目的にボランティア活動を行っていました。具体的には、小中学校における取り出し授業の日本語サポーター、町役場やボランティアの方々と協働で在住外国人を対象とした日本語教室の運営、イベントの開催を行いました。

活動をする中で、「外国人」と「日本人」に限らず、様々な出身や職業、年齢の方に会ったり、インドネシア出身の方々によるパーティーに招いていただいたりしたことで沢山の異文化に触れました。新たな発見をしたり、改めて「異文化とは、多文化とは何だろう」と考えたりする機会がありました。小中学校の先生方や子どもたち、日本語教室の参加者の方々、ここには書ききれない程多くの方との交流を通じ、成長できたと感じています。



江口 奈和さん(教育学部養護教諭養成課程4年次)

教育支援ボランティア(常磐大学高校)に参加

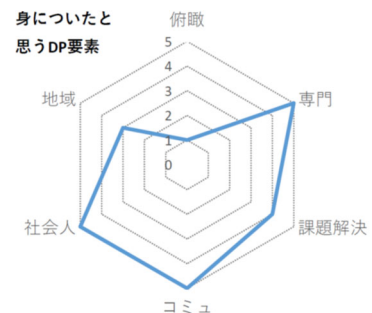


3年次の小・中学校の養護実習前に保健室と養護教諭の役割を理解し、日々の活動内容を把握することにより実習における学びを深めるため、母校での参観を依頼し、ボランティア活動に参加しました。

養護教諭になるための大学における学びは新しいことばかりで、何がどのように実際の現場で活かされるのかを知ることは自分の知識を整理するために重要です。このことは他の選修の学生にも共通することだと思います。2年次の後学期に履修する「養護活動演習Ⅰ」を基に保健室経営や養護教諭の職務について理解し、学校現場で健康診断の補助やクラ

スマッチでの救護補助などを行いながら養護教諭や生徒等の日常を観察することで、保健室と養護教諭の機能・役割がみえ、現場の課題理解にもつながり大学での学びに繋げることができました。

また私はこれらの活動を通じて、救急処置の知識・技術の不足を痛感しました。そこで日本赤十字社における救急法の講習を受講し、正しい知識・技術の習得に努めました。その他、メンタルヘルスに関する集中を受講し現代の健康課題の理解を深めました。





発展学修

発展学修のねらい

「発展学修」は、学生のみなさんがそれぞれのテーマを持って自主的に取り組むものです。「自分の住んでいる市町村の職員の方とっしょに、地域の課題について調査し、その解決のための提案を行う」、「企業の方から学生のみなさんとっしょに取り組みたい商品開発のテーマをいただき、プランニングして提案し商品化につなげる」なども「発展学修」のひとつです。こういった地域・学外からのご要望に学生の多くのみなさんが呼応していただけるよう、社会連携センターなどがサポートしていきます。また、ゼミの学習の発展としての地域での研究、ビジネスプランコンテスト、映像コンクールなど各種のコンテストなどへの応募なども含め、自由なテーマ設定が可能です。必要な指導、助言、サポートを行いますので、ぜひ、新しい分野にも挑戦してください。

チャレンジする学生へのメッセージ

(社会連携センター副センター長：西野 由希子)

茨城大学の学生たちは、さまざまな形で地域での活動を行っています。ゼミの活動や、地域志向教育プログラムとしてのものもありますし、サークルや部活動、ボランティアでも地域とつながってきました。また、学生たちが自主的にグループをつく



り、大学が活動を支援する「学生地域参画プロジェクト」では、学生たちが自治体や企業、市民の方たちとっしょに、自由に地域での活動に取り組んでいて、地域のみなさまからも歓迎され、評価いただいています。貴重な経験をさせていただけますし、やりがいのある活動です。

これからはiOPを活かし、こういった活動がさらに活発になることを願っていますし、ぜひ、1年生、2年生から積極的に関わって、iOPにつなげていただきたいと思います！

主なプログラム

発展学修は、社会連携センターや各学部で企画される活動が中心になります。どのようなプログラムが用意されるかについては、23 ページの相談窓口や、掲示及び各種ガイダンスで情報提供します。

また、大学が提供したプログラム以外に、学生の皆さんが個人あるいは団体で取り組む活動も iOP として認められる場合があります。iOP として認められる活動かの判断は、23 ページの相談窓口にお問い合わせください。

発展学修体験談

川田 綾香さん（人文学部社会科学科 3 年次）

「廃校那珂湊二高を活用した多世代交流プロジェクト」

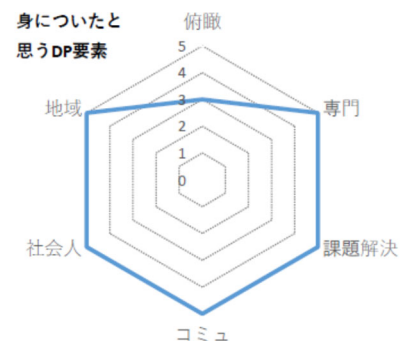


私は、2017 年 6 月に行われたひたちなか市役所主催の「廃校活用学生会議」終了後、学生が継続的に那珂湊二高の利活用に携わっていただけるような仕組みを作るため、参加した学生数名で茨城大学公式サークル「廃校那珂湊二高を活用した多世代交流プロジェクト」を立ち上げました。

これまで、茨城大学やひたちなか市役所、那珂湊地域の方々にご協力いただきながら、多世代交流イベント

「おいもカフェ」や「廃校に関する講演会」を学生主催で開催しました。

2018 年 10 月には、学生考案の宿泊施設「グランピング」も企画しています。廃校が人々をつなぎ、多世代交流の場となるよう、これからも様々なイベント等を企画・運営していきたいと考えています。



梅津 尊子さん（教育学部養護教諭養成課程 3 年次）

日本一つながる学食プロジェクト(つな食)



「日本一つながる学食プロジェクト(つな食)」は、茨苑会館内にある学生食堂のリニューアル計画をきっかけに発足しました。学食を様々な人や情報が集まって繋がる場に、学食を利用する人が自主的に地域に参画できるようになることを目標としています。

活動の内容は、新メニューの開発、他団体と協力したイベントの開催、地域や企業との商品開発などです。

つな食の活動により、様々な団体の思いを一つの形にすることや、自団体を宣伝すること、大人の方々と接し方などを学ぶことができました。今後の学生生活だけではなく、卒業後も役立つことを得ることができました。大学生のうちしかできない活動ができ、貴重な経験となっています。



江津 亮太さん（教育学部社会選修 4 年次）

教育学部 iOP「教員としての実践力をつけるための活動」

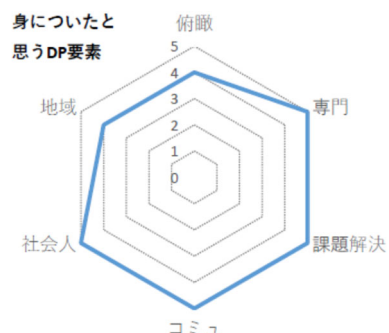
注) 教育学部は平成 29 年度から iOP を先行実施しています。



教育学部社会選修で5日間にわたって行われた「教員としての実践力をつけるための活動」に参加しました。内容は阿見町にある予科練平和記念館における「社会科見学」を通して、具体的な指導案や児童生徒を連れて見学をする際に注意する点などを考えるというものでした。大学内の授業とは違う視点で取り組むことで多くの気づきがあり、社会科に関する指導法と関連付けながら教師として必要な資質・能力を向上させることができるのがこの活動の良いところです。具体的には、その場所を

何の目的で選び、児童生徒に何を学ばせるのかを実際に考えられることは貴重な経験になりました。

今後の課題としては、自分たちが考えるだけでなく、実際の小学校や中学校と協力をして、見学しているところを見学するなど、幅広く活動ができればいいと思います。



6 iOP 活動に当たっての留意事項

iOP 活動の内、インターンシップなど学外機関に受入れてもらう活動は、茨城大学学生の学びのために受入先（企業・官公庁・学校等）の協力をいただいて成り立っているという意識を常に持ってください。また、学生の意欲が感じられないようでは、「主体的な学び」を支援してくれる受入側にとっても「学生の面倒を見ただけ」「負担」になってしまいますので、受入側にも意義のあったものと感じていただけるよう、積極的に取り組んでください。

活動に当たっての留意事項等については、各種活動の事前指導を通じて行われます。

7 iOP の修了・活動の認定

iOP の活動を終了した場合は、大学が活動を認定します。認定された場合、認定証が交付され、さらに学業成績証明書に活動内容が記載されます。

認定は所属学部からの報告に基づいて全学教育機構で認定します。

なお、認定の時期は、3年次第3クォーター（iOP クォーター）で終了した活動については、原則として当該年度末までに認定されます。

8 iOP に関する相談等窓口

iOP は活動内容に応じて大学における相談等の窓口が異なります。詳しくは活動に関する説明会や事前指導等で説明がありますが、iOP の計画・準備段階においては下記の窓口に相談してください。

活動内容等		担当課・係等
iOP 全般に関すること		学務部学務課
海外研修	留学	グローバル教育センター
	短期海外研修	
インターンシップ	各学部で実施するもの	各学部学務係（グループ）
	キャリアセンターで実施するもの	キャリアセンター
	国際インターンシップ	グローバル教育センター
サービス・ラーニング	ボランティア活動	学生支援センター
	教育支援ボランティア	全学教職センター
発展学修	課題解決ゼミ	各学部学務係（グループ）
	自主研究	社会連携センター

茨城大学 iOP ガイドブック

発行年月日 平成 30 年 4 月 1 日

発 行 茨城大学全学教育機構